

わが国最初の勅撰和歌集『古今集』の編者である紀貫之は、その「仮名序」で言っています。「やまと歌は、ひとの心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」。和歌の種子は「人の心」であり、それは外界の変化に誘われて、万の「言の葉」すなわち歌となって現われ出る、というわけです。当時から千年以上を隔てた現在、文学表現の中心は「和歌」ではなくりましたが、その本質である「人の心」と「言の葉」との関係は少しも変わりません。たとえば今、文章読本とか名作アンソロジーといった類の撰集を開いてみると、そこには実に多彩な現代文の形がサンプリングされています。もともと固有の文体を持つ作家たちが、それぞれの作品にふさわしい雰囲気づくりのために、表記や字づらにも精妙な工夫を凝らしているからです。ある作家はひらがなを多用し、柔らかな女性的な視覚的效果を狙っていますし、反対に別な作家は難読漢字を多用し、そこに煩雑なほドルビをふり、怪奇で重々しい雰囲気をもし出しています。有限である「言葉」を使いながら、その複雑に組み合わせられた「文字」列たちは、どこまでも増殖し変幻し、まさに無限の様相を呈しています。その千変万化する日本語の豊かさと広がりを目の当たりにして、あらためて私たちの胸中には、先の貫之の言葉がこだまするのを感じざるを得ません。「文学表現はすべて」ひとの心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」と。

わが国最初の勅撰和歌集『古今集』の編者である紀貫之は、その「仮名序」で言っています。「やまと歌は、ひとの心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」。和歌の種子は「人の心」であり、それは外界の変化に誘われて、万の「言の葉」すなわち歌となって現われ出る、というわけです。当時から千年以上を隔てた現在、文学表現の中心は「和歌」ではなくりましたが、その本質である「人の心」と「言の葉」との関係は少しも変わりません。たとえば今、文章読本とか名作アンソロジーといった類の撰集を開いてみると、そこには実に多彩な現代文の形がサンプリングされています。もともと固有の文体を持つ

千変万化する日本語の豊かさと広がり

あはれ知る。  
こころ揺れて、言の葉そよぐ。

わが国最初の勅撰和歌集『古今集』の編者である紀貫之は、その「仮名序」で言っています。「やまと歌は、ひとの心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」。和歌の種子は「人の心」であり、それは外界の変化に誘われて、万の「言の葉」すなわち歌となって現われ出る、というわけです。当時から千年以上を隔てた現在、文学表現の中心は「和歌」ではなくりましたが、その本質である「人の心」と「言の葉」との関係は少しも変わりません。たとえば今、文章読本とか名作アンソロジーといった類の撰集を開いてみると、そこには実に多彩な現

イワタ中明朝体オールド

イワタ中明朝体

活字時代から使われてきた「岩田明朝体」を、できる限り忠実に再現しました。強調した起筆部や、かな文字の独特のラインなど細部にこだわって制作しています。漢字とかなにメリハリがあり可読性に優れているので、書籍など本文縦組みに最適です。